

(別紙)

成果の説明書

(氏名) 岡田知之	(学部) 経済学部
<p>1 重要事項</p> <p>バブル崩壊以降、日本は長年にわたり不況に苦しみ、特にデフレーションは日本の長期停滞を象徴する現象として、長く問題視されてきた。このような状況を踏まえ、高崎経済大学産業研究所ではプロジェクト研究として、デフレに関する研究を行うこととなった。私もこのプロジェクト研究に参加させていただくこととなり、近年は物価と関連のあるテーマ、具体的には貨幣的均衡に関するテーマを中心に考察を行ってきた。</p> <p>第2次安倍内閣が発足して以降、アベノミクスとして世に知られている政策が実施され、日本も不況の状態を脱したといわれている。アベノミクスの三本の矢、すなわち大胆な金融政策、機動的な財政政策、民間投資を喚起する成長戦略のうち、現状でもっとも効果があったと考えられているのが大胆な金融政策である。日本銀行の黒田総裁のもと異次元緩和といわれる、大胆な金融緩和が実施され、それによって円安や株高が生じ、経済が活性化したと考えられている。</p> <p>累積債務の問題を抱え、財政政策に限界がある現状で、大胆な金融政策に依存して経済の活性化を図るのは仕方がない面もあるのかもしれない。しかし、極端な政策は(将来的に)経済の混乱を引き起こす原因となる可能性があるのではないか、という疑念を私はずっと抱いていた。このような疑念と関連する形で、産業研究所のプロジェクト研究として、貨幣的均衡の多様性に関する考察を行った。</p> <p>具体的な考察の内容は、次のようなものである。まず、貨幣の存在をふまえた世代重複モデル(OLGモデル)をもちいて、各経済主体が将来の物価を予測し、効用の最大化をはかったとき、均衡における将来の物価が各経済主体の物価の予測値と一致する完全予見のもとでの均衡が物価一定という状況のもとで実現する可能性を確認した。このような貨幣的均衡を定常型貨幣的均衡と呼ぶことにする。そして、定常型貨幣的均衡のもとでの経済主体の将来物価に関する予想と異なる予想を経済主体が行った場合には、定常型貨幣的均衡と異なる貨幣的均衡が実現する可能性があることを示した。考察の中で示した貨幣的均衡は、状態の変化に応じて物価が変化する可能性があり、かつ、経済主体の将来物価に関する予想と均衡における将来物価が一致する均衡となっている。このような均衡を状態依存型貨幣的均衡と呼ぶことにする。状態依存型貨幣的均衡は定常型貨幣的均衡を含むより広い意味での均衡であり、連続的に無数に存在することが考察の中で示されている。このように均衡が多様に存在する状況下では、環境の変化が現状の均衡を大きく変化させる可能性があり、これは大胆な金融政策が経済の不安定化をもたらす可能性があることを示唆するものである。</p> <p>この考察をまとめた「不確実性下における貨幣的均衡に関する考察」は、産業研究所プロジェクト研究の成果として出版された『デフレーションの経済と歴史』の第3章に掲載されている。</p>	
<p>2 その他の事項</p>	
<p>3 次年度以降の計画・抱負</p> <p>近年はプロジェクト研究との関連で、貨幣的均衡に関する考察を行ってきたが、今後</p>	

は新しいテーマに取り組みたいと考えている。

また、研究というレベルには遠く及ばないかもしれないが、完全ベイジアン均衡の信念の形成に関して興味があるので、この点に関して理解を深めたいと考えている。